江上波夫編「西アジアI」

世界考古学大系第10巻、本文213ページ、原色版6図、グラビア版138図、本文挿図477図、古代西アジアの編年2図、遺跡分布図、参考文献9ページ、平凡社刊、BB5、1954年1月、定価1000円。

ここ3～4年、「オリエント・ブーム」という言葉がきかれた。このブームといわれるものの実体は、古代オリエントの文化遺産を展示する会があいついで開催され、オリエントにかんする翻訳書や著書の刊行が盛況を呈し、さらに当地方への、わが国はじめての学術調査団が派遣されたことなどにあろうかと考えられる。展覧会は、昨年ひらかれた劃期的な「ペルシア美術展」につづいて、エジプト展も企畫されているときく。いっぽう学術調査も、前年にひきつづいて、あるいは新しい計画のもとでおこなわれようとしている。オリエント・ブームは、たんなるブームに終ったのではなく、本格的な研究の前奏曲として、研究を推進する役割を果したかのようにおもわれる。

このような時期に、江上波夫氏の編集になる、「西アジアI」が、世界考古学大系の第10巻として出版された。本書はメソポタミアを中心としイラン、アナトリア、シリア、パレスティナを含めて、旧石器時代から、メソポタミアではイシン・ラルサ時代、隣接地域では青銅器時代初期まで、すなわち太古からほぼ前第3千年紀までをとりあつかっている。凡例でのべられているように、「西アジアにおける、このような古い年代の歴史や文化を考古学的に取り扱った専著は、わが国にはかつてない」のである。たしかに一つの記念すべき成果というべきであろう。

編集者の江上氏は、とくにここで紹介するまでもなく、東京大学のイラク・イラン遺跡調査団の団長であって、日本人として西アジア古代文化の遺跡をはじめて発掘した学者である。また他の執筆者も、大部分は、その調査団のメンバーとしてあるいは各種の展覧会における指導者として活躍された人びとであるから、たとえ専門が西アジア考古学、あるいは西アジア古代史でないとしても古代オリエントにかんする考古学の知識や経験という点からいえば、現在の日本の学界においては有数の人たちであろう。したがって、わたしたちは、本書をもって、日本における西アジア考古学の水準を示すものと、いちおう考えてよい。

本書の構成を簡単にのべると、はじめに、江上氏が「オリエント文明の源流」と題して、メソポタミア文明の成生過程を、すなわち本書でとりあつかう時代を概観している。ついで詳述にはいり数人の執筆者が、旧石器時代、中石器時代およびジャルモ、ハッスナ、ハラフ、ウバイド、ウルクの文化と、これに併行する近接地域の諸文化の遺跡と遺物を解説しながら、「狩猟採集生活から農耕牧畜生活へ」展開してゆく姿をえがこうとしている。次のジェムデト・ナスル期から初期王朝時代、アッカド王朝時代、新シュメル時代にかけては、「階級社会の成立」というテーマのもとに、数人の執筆者が各時代の遺跡、遺物を詳述し、そのあとで前第3千年紀における東地中海域の文化をのべ、最後に西アジアの人種問題に相当のスペースをさいている。

西アジアにおける、この時代には、生産経済の

発生、都市の形成、階級の分化、国家の成立というような、歴史上の重要な諸事件があいついで起った。これらの諸事件を骨組として、この時代の動きを、西洋学者の諸見解を粗述しながら、多数の図版と編年表をもちいて、具体的に、理解しやすく叙述しようとしたところに編集者の苦心のあとがみられる。近年とくに増加した、旧石器時代と中石器時代の資料が丹念に集められ、さいきん論議の的になっている農耕牧畜の発生にかんする諸見解が、整理された形で紹介されている。オリジナルな写真による図版も、鮮明で美しい。これは、かつて日本で出版された。複写による図録や全集ものにはみられない優れた点である。

本書はこのように、西アジア考古学の概説書として、あるいは入門書として、親しみやすい形にまとめられている。著者たちの、テル・サラサートにおける発掘の経験が、西洋学界の成果を、短時日で摂取し、理解しやすい形で呈示することを可能にしたのであろう。しかしながら、こんご研究を進めてゆくうえに、看過できない重要な問題もいくつか含まれている。以下その点にふれてみたい。

まず第一に、本書でのべられている文化の内容に疑問がある。叙述の形式は、各時期について、まず個々の遺跡を解説し、つぎにそれらの遺跡から発見された遺物を説明して、これに「……期（あるいは時代）の文化」という表題をつけるという体裁をとっている。全巻をつうじてこの形式であるから、これが編集方針であるらしい。たとえば初期王朝時代の文化においては、とくに宗教に関係あるものをあげると、神殿、神像、礼拝者像、祭祀具、浮彫板などが、それぞれ別個に説明されている。しかるに、これらの備品と建造物を必要とした宗教そのものについては、ほとんどふれていない。つまり遺物の解説におわっている。考古学においても、その目的とするところは、宗教文書を参照しながら、これらの材料から、まず当時の宗教を復原することである。そして、その宗教のあり方を検討することによって、シュメル文化の性格を解明する一つの道が開かれるものと考える。本書にみられるような、遺跡、遺物を解説すれば、それで文化を述べることができる、という理解の仕方は、十分に検討されねばならない。初期王朝期以降において、小林、新両氏の記述がそれぞれ建築史、美術史にたよって、考古学から離れる傾向がみられるのも、文化にたいするこのような理解の仕方に、その原因が求められるであろう。また、この時代にかんする江上氏の概観が文献史的になったのも、この傾向と無関係ではないとおもわれる。記述が建築史的、美術史的になるのは、図版を選択するとき、建築遺構や彫刻品に重点がおかれる結果でもあろうが、美術史的な側面の偏重は、展覧会のさいにも、しばしば見うけられるところであって、一考を要する。

文明の形成期に、メソポタミアが他の地域とどのような関係をもっていたか、について説明がないのも物足りない。西アジアが文明の発祥地であったことは、現在ではおそらく何人も認める事実であろう。これは西アジア考古学が、最近三十年間に発掘した大きな成果である。しかし、ジェムデト・ナスル期におけるナイル河文明との、初期王朝期におけるインダス河文明との交流が証明されたことも、この間における重要な成果であってこれらの諸文明との交渉をつうじて、メソポタミア文明はいっそう豊かになったのである。他の諸文明との関係について、また西アジア諸文明の相互関係について、十分な考慮が払われていないことは、巻末の編年表でも認められる。

おわりに、古代西アジアの編年Ⅱについて一言しておきたい。この表は、ある遺跡の各層について、数人の学者がどのような実年代をあてたか、を材料とし、著名な16人の学者の編年から一表

おわりに、古代西アジアの編年Ⅱについて一言しておきたい。この表は、ある遺跡の各層について、数人の学者がどのような実年代をあてたか、を材料とし、著名な16人の学者の編年から一表を組みあげて、各編年の差異が一見してわかるように示されている。編年の問題は、古代史をとりあつかうさい特に重要であって、それには文化の前後関係、すなわち相対年代の決定と、実年代の考定という二つの問題がある。メソポタミアの、いわゆる先史文化における相対年代については、各学者の間に大した異論はない。したがって現在では、西アジア各地における同一の、あるいは類似した文化の間に、どのような併行関係があるかそれが何年の古さをもつかという点に問題の中心がある。そうすると、編年Ⅱにみられる表示の仕方では、各学者の考定した実年代の差、およびある地域における遺跡相互間の層位の関係は比較的よくわかるが、たとえばメソポタミアのある文化と、イランのそれに類似した文化との関係がどうかという問題になるとわかりにくい。各学者の編年の根拠を十分に検討して、もっとも妥当性があると判断される編年を一つだけ表示し、有力な根拠をもつ異説があれば、それを付記するという方法をとれば、諸文化の関係をもっと理解しやすい表にできたのではないかとおもわれる。

また、この編年のうち、実年代が与えられた根拠は、ジャルモ遺跡など新石器文化初期の年代について、C^{14}の測定結果が本文中にあげられているだけである。実年代考定の基礎となっている、Hammurabi即位年代の決定にいたる過程、T. Jacobsenの王名表の研究、P. Delougazの堆積層の厚さによる算定方法などについても説明がほしい。算定の基準が示されていないために、実年代の考定に、なぜ差が生ずるかが理解しにくいであろう。古代史における実年代の考定は、他の地域との関係を考察するうえに、もっとも重要な要素の一つとなる。たとえば、Hammurabiの即位年代が前18世紀内にあったとみとめられるようになったのは、1940年代のことであって1940年の前と後では400～500も引下げられるという変動があった。おそらく、この問題は、「西アジアⅡ」で説明されるものと予測されるが、ついでにのべるならば、この変化によって、当時のシリアの政治状勢にかんする知識が大幅に修正されたといわれる。こういう場合があるから、実年代をあてはめるときには、こんご新しい資料が発見されたとき、どの方向に、どのていど変化する可能性があるか、つまり、その年代がどの程度の確実さをもって決められているかを明確にする必要がある。編年における確かさの問題は、ことに世界考古学大系という形で、世界の古代文化を網羅するような場合には、各地域における年代の相互関係を比較するうえにも重要であろう。発行を予定されている「西アジアⅡ」では、編年の根拠についても、ぜひ説明していただきたい。

(小野山　節)